

いじめを未然に防止する学校組織づくり

— 「支持的風土づくり」の視点を活用した校内研修の考察 —

梶 浦 い づ み¹

「いじめ防止対策推進法」施行から3年が経過し、文部科学省は、学校のいじめ対策組織や教職員の情報共有等の課題を指摘している。本研究では、いじめ対策においては未然防止の取組が重要であり、その基本は日々の教育活動の充実であると捉えた。そこで、「支持的風土づくり」の視点から、日頃の教育活動を見直す校内研修を半年かけて実施し、いじめの未然防止に向けた組織的な取組について考察した。

はじめに

いじめが社会問題として取り上げられた1980年代から、国はいじめ対策を講じてきた。そして、平成8年、文部大臣は、教職員に向けて、「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうるものである」（文部省初等中等教育局長 1996）と訴えかけた。

平成18年には、いじめの定義が、従来よりもいじめを受けている児童・生徒の立場に立つものへと変更され、平成25年の「いじめ防止対策推進法」施行により、全ての学校に対して、学校いじめ防止基本方針の策定と、いじめ対策組織の設置が義務付けられた。

しかし、平成27年に、文部科学省は「平成26年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』等結果について（通知）」（文部科学省初等中等教育局 2015）の中で、「いじめ防止基本方針の策定やいじめ防止等の対策のための組織の設置が行われていない学校がある」、「対策が何らとられることなく放置されたいじめが多数潜在する場合がある」と、依然として憂慮すべき状況にあるとしている。

いじめは、人として当たり前の権利を侵し、最悪の場合は命に関わる重大な問題であり、学校全体で常に対策を講じなければならない。

国立教育政策研究所（以下、「国研」という）は、「問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方」（国研 2010 p. 2）の中で、生徒指導の取組の中心は児童・生徒に対する日々の働きかけにあるとしている。また、問題が起きてから対応するという考え方から、問題が起きないようにするという予防的な考え方への変更は、特にいじめのように目に見えにくい問題事象の場合には重要であるとしている。

そこで、教職員の日々の教育活動を通して、いじめの未然防止に組織的に取り組むための研究を行った。

研究の目的

国研の「生徒指導リーフ」シリーズには、「未然防止の基本は、全ての児童生徒が安心・安全に学校生活を送ることができ、規律正しい態度で授業や行事に主体的に参加・活躍できる学校づくりを進めていくことから始まる」（国研 2013）、「何か特別なことをするのはなく、日々の授業や行事を改善する中でいじめが生まれにくい風土をつくり出す」（国研 2012）とある。

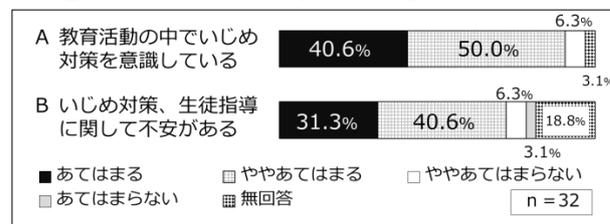
本研究では、いじめ対策の基本は未然防止と捉え、教職員が日々の教育活動の中でいじめの未然防止に組織的に取り組む方策について、検証及び考察する。

研究の内容

1 いじめ対策の課題

文部科学省が所管する平成28年度はいじめ防止対策協議会では、学校のいじめ対策について、教職員の業務の膨大さに触れた上で、情報共有の体制及びいじめ対策組織の在り方、構成の工夫・改善や校内研修等、より実効的な対策を講じるための議論がなされた。

6月に、所属校で全教職員（32名）対象に実施したアンケート調査①によると、90%以上の教職員が教育活動の中でいじめ対策を意識していた（A）。一方で、不安を感じている割合（B）も70%を超えていた（第1図）。



第1図 アンケート調査①（6月実施 一部抜粋）

不安に関する記述の内容は様々であった。まず、現在の所属校では、いじめやいじめと思われる事案等に関する生徒指導件数が比較的少ないことから、経験不足で実際の対応に自信がないという不安が多かった。また、経験年数や年代の構成が二極化する中で、「教え

1 葉山町立葉山中学校
 研究分野（今日的な教育課題研究 いじめ対策に係る調査研究）

(伝え)たい教職員と、「知り(聞き)たい」教職員の双方が、「何から伝えればよいのか」、「何を聞けばよいのか」が分からず、学び合う場面が少ないことに不安を感じていた。また、全体で指導方針を統一しても、学年や分掌等で活動する際に、認識や指導方法にずれが出ていないかという不安もあった(第1表)。

第1表 いじめ対策に関する不安(記述より抜粋)

<ul style="list-style-type: none"> ・自分は生徒の変化やシグナルに気付いているのか ・経験が浅く、対処が適切なのか分からない ・実践の少ない若い世代が心配である ・ベテランの先生からレクチャーしてほしい ・教員の認識や理解度に差がないだろうか ・指導方針を統一し、連携が図れているか
--

平成25年度神奈川県立総合教育センター「いじめ対策プロジェクト(報告)」(以下、「いじめ対策プロジェクト」という)によると、いじめ防止のために教職員が生徒の状況や課題、背景等を正しく見立て、適切な指導を行うための指導力向上が求められており、教職員間で学校の取組への共通理解を深める、生徒への接し方を学び合う等の校内研修会の効果が期待されている(神奈川県立総合教育センター 2013 p.37)。

その一方で、国研(2010 p.2)は、未然とは「未だ起きていない」事象であるため、実際に起きている事象に比べて教職員が危機感を感じにくいことや、即効的な成果や取組の手応えを実感しにくく、どうしても取組が低調になったり持続できなかつたりすることが、組織的に未然防止に取り組む難しさであるとしている。

2 研究の手立て

本研究は、国研の「生徒指導リーフ」シリーズに基づき、いじめの未然防止に向けた日頃の教育活動の充実を図る取組について、校内研修を通して検証した。

検証は、いじめ対策プロジェクトの「支持的風土づくり」(神奈川県立総合教育センター 2013 p.25)の視点を活用して行った(第2表)。

第2表 「支持的風土づくり」のための4つの視点

教職員同士 ～同僚性の確かさ～	子どもへのかかわり ～不安と不満を理解～
教職員同士の支え合い、協働する力を備える。高い同僚性は子どもたちにも伝わり、安心感を与える	子どもたちの抱えている不安や不満を理解し、その気持ちに寄り添い、解消に向けたチームでの取組
授業以外の時間の活用 ～相互理解と自己肯定感の育成～	より良い授業の実践 ～学習指導と生徒指導との一体化～
学校行事等を子どもたちの自己肯定感を高める機会とし、休み時間等の子どもたちとの会話から、友人関係やトラブルの糸口に気付く	学習規律(時間を守る、人の話を聞くなど)と学習意欲(自分から進んで取り組む)について、教師が意図的・計画的に配慮する

支持的風土は、児童・生徒と教員がつくり出す「親和的、許容的、安定的な集団関係を助長し高める学級風土」からつくられる。支持的風土づくりに向けては、4つの視点(第2表)を意識した教育活動が大切である。検証では、教職員がこの4つの視点を意識することで、日頃の教育活動がどのように変容し、どのような成果が見られるのかを考察した。

3 研究の仮説

教職員が、支持的風土づくりの視点を意識した取組を行い、日々の教育活動を充実させることで、いじめの未然防止に向けた組織づくりができる。

4 検証(校内研修)

校内研修では、支持的風土づくりの4つの視点に基づく日頃の教育活動の見直しを行った。そして、教職員の不安を解消し、組織としての取組を進めるために、検証の実施計画の全体を通して、同僚性を重視した。

(1) 校内研修のねらい

支持的風土づくりという視点から教育活動を見直し、協働して課題に取り組むことを通して、教育活動の充実を図り、いじめ対策への組織的な取組につなげる。

(2) 校内研修の概要

【実施期間】 平成28年6月～平成28年11月

【対象】 葉山町立葉山中学校教職員(32名)

【主な内容】 アンケート調査(4回)

校内研修会(1回)

振り返り：振り返りシート記入(3回)

グループ協議(1回)

(3) 校内研修の実施計画

学校全体で継続的に取り組むために、現状の把握や教職員の意識の変容を測るアンケート調査を複数回行い、各調査の実施後には、結果報告及び情報提供を行った。実施に当たっては、一回の取組の所要時間が長くないように心掛け、視覚的要素やワークシート等も取り入れた。また、校内研修会では、協議や発表等、教職員の主体的な活動に多くの時間をかけた。

各段階のねらいを踏まえて作成した実施計画は以下のとおりである(第3表)。

第3表 校内研修の実施計画

ねらい	実施内容
1 現状の把握	学校の実態、教職員の不安の把握 アンケート調査①(意識調査)
2 個々の振り返り	日頃の教育活動の振り返りと分類 アンケート調査②(事前調査)
3 課題の確認・目標の設定	校内研修会 アンケート調査③(事後調査)
4 実践と自己評価	目標を踏まえた実践 振り返りシート(月1回×3)
5 実践の検証・目標の再設定	グループ協議 アンケート調査④(意識調査)

ア 「1 現状の把握」

検証(校内研修)の初回に実施したアンケート調査①は、正確な実態把握をするために、無記名とし、調査の結果は校内研修の方向性を決定するための資料とした。

イ 「2 個々の振り返り」

アンケート調査①の結果から、いじめ対策に関する学校の現状と課題を示した。その上で、校内研修の実施計画とねらいを再確認し、アンケート調査②を行った。調査用紙には、4つの項目として、支持的風土づくりの4つの視点に基づく活動内容を簡潔に提示した。

教職員は、まず、4つの項目ごとに自身の教育活動の実践を整理して書き出し、さらに、現在最も意識している項目を1つ選択した。4つの項目と、それを選んだ人数の内訳は以下のとおりである(第4表)。

第4表 アンケート調査②の項目と現在最も意識している項目の人数の内訳

教職員同士の共通理解や連携 教職員同士の共通理解や連携を図り、支え合うためにしていること (5名)	生徒の変化の察知 不安・不満・ストレスの把握や理解等、生徒の変化を察知するためにしていること (8名)
教科の授業以外での生徒の活躍の場づくり 総合的な学習の時間や学活、行事や部活動等、授業以外の場面で生徒の活躍の場づくりのためにしていること (4名)	より良い授業の実践 わかる授業・生徒の学習意欲の向上・学習規律の定着等、より良い授業の実践のために教科の授業で行っていること (10名)

ウ 「3 課題の確認・目標の設定 (校内研修会)」

校内研修会は、アンケート調査②の結果を基に計画し、夏季休業中に2時間の設定で実施した(第5表)。

第6表 グループの目標一覧

項目	4つの視点	目標設定の理由	目標	効果測定を意識した目標の留意点
1 教職員同士の共通理解や連携	教職員同士 ～同僚性の確かさ～	安心できる場づくりのための実践に大切なのは、「一貫性のある指導」「手法の手厚さ」等。その土台は、「風通しの良い教員間の関係づくり」	1日1回以上の教員同士の意見交換	・自分の意見をまとめてから相談する
2 生徒の変化の察知	子どもへのかかわり ～不安と不満を理解～	生徒一人ひとりとの会話を意識的に増やし、それを教員が測れる目標を設定した。授業で生徒と関わるという観点から、「クラス」ではなく「学年」とした	ひとり一言は毎日話す！ (学年で40人)	全員(40人) A° 30人以上 A 半数以上 B 10人以上 C° 一桁 C
3		生徒との関わり方、声のかけ方の統一は難しい。「今やっていること」+「できない時には声をかけあうこと」を意識したい	ケースバイケースでの声かけを意識する	・1週間でクラス全員に声かけ ・常に学年のフロアに職員がいる →お互いに声をかけあって協力できる関係づくり
4 教科の授業以外での生徒の活躍の場づくり	授業以外の時間の活用 ～相互理解と自己肯定感の育成～	生徒の活動の場にいることは、生徒を理解する上で大切なこと。教員間の連携を図り、負担なく、学校全体で協力して行いたい	・生徒の活動の場に来るだけ足を運ぶ ・顔をだし、生徒に声をかける (1分でもすこしでも)	・顧問同士の連携、教員同士の連携
5 より良い授業の実践	より良い授業の実践 ～学習指導と生徒指導との一体化～	全体では難しいところもあるので、一人ひとりを主体として見ていく	・生徒(一人ひとりが)主体の授業 ・授業を通した個々の見取り	・生徒が活動できる場があったか (ペアワーク、グループワーク)
6		何にしても「伝える」ことが重要である。より理解しやすい表現に言い換える、また、授業につながる話題選びも意識する	わかりやすい言葉を使う！	・話し方、話題を含めて →学習意欲につなげる

第5表 校内研修会の流れ

1	今、なぜ「いじめ対策」なのか
2	アンケート調査①の結果から見える学校の現状
3	グループワーク 「明日からの活動目標づくり」 (1)実践報告：グループ(視点)ごとの交流 (2)協議①：実践のまとめ (3)協議②：活動目標の設定
4	おわりに

校内研修会の冒頭に、過去の自死事件、いじめ対策の変遷、県内の重大事態の事例及び「いじめ防止対策推進法」等について10分程度の講義を行った。

次に、アンケート調査①の結果と、記述から読み取れるいじめ対策に関する教職員の不安要素を具体的に示した。また、アンケート調査②の4つの項目は、総合教育センターの研究に基づく、いじめの未然防止に向けた「支持的風土づくり」の4つの視点であり、日頃の教育活動の充実がいじめ対策の推進につながることを全体で確認し、グループワークの目的を共有した。

グループワークのグループは、アンケート調査②で、最も意識している項目が共通する5名程度で編成した。なお、第4表の右側の2項目は人数が多いため、それぞれをさらに二つに分け、計6グループとした。

グループワークの最初に、アンケート調査②の自分のグループの項目に関する実践を付箋に書き、実践報告として付箋を模造紙に貼りながら意見を交流した。

次に、協議①として、貼った付箋を整理しながら実践の成果や課題をまとめ、全体に発表した。

その後、協議②として、グループの視点を踏まえた活動目標と、効果測定を意識した留意点を設定し、全体に発表した(第6表)。

校内研修会の最後に、学校教育目標(葉山町立葉山中学校 2016)に焦点を当てた。所属校では、目標の実現に向けて、「目指す学校像・目指す生徒像・目指す教師像」の三つの柱を設定しており、「目指す学校像」の中に「安全で安心して学べる温かな学校」とある。校内研修会は「目指す教師像」の具現化のための取組であり、その成果は「目指す生徒像」に反映され、「目指す学校像」、そして学校教育目標の達成につながるということを全体で共有し、まとめとした。

校内研修会後にアンケート調査③を実施し、意識の変容等を測った。調査結果を報告する際に、全グループの目標一覧(第6表)を配付し、目標を踏まえて9月からの教育活動に取り組むことを全体で確認した。

エ 「4 実践と自己評価」

9月からの取組では、「振り返りシート」(第7表)を使用した。自己評価を基本に、1か月ごとに、「具体的な実践」「自身の変化」「生徒の変化」「他のグループの目標について」等を記入した。取組の流れを確認しやすいように、シートは3か月分を一枚にまとめた。

第7表 振り返りシート(抜粋)

チェック実施日	9月21日 職員会議
4つの視点から	子どもへのかかわり ~不安と不満を理解~
グループの目標	ひとり一言は毎日話す!(学年で40人)
	(手立て・留意点等) 全員 A° 30人以上 A 半数以上 B 10人以上 C° 一桁 C
ご自身の具体的実践 (グループ目標を踏まえて 実際に行ったこと)	
現在の段階 (1-2-3-4-5) とその理由	8/29() ⇒ 本日() (理由)
ご自身の変化 (生徒との接し方や 気持ちの変化等)	
生徒の変化 (生徒の様子や 感じたこと等)	
他のグループの目標で、 実践している・したいもの (グループ番号で)	(実践している) (これから実践したい)
その他何かあれば お書きください	

オ 「5 実践の検証・目標の再設定」

3か月間の実践の後、11月に目標の検証のためのグループ協議を行った(第8表)。

第8表 目標の検証のためのグループ協議の流れ

1	振り返りシート(11月分)の記入
2	個々の実践の報告(振り返りシートを基に)
3	グループ協議(目標の検証、今後の課題等)
4	発表

最初に、個人で振り返りシート(11月分)を記入して、自分自身の3か月を振り返り、次に、グループで個々の実践を報告した。実践報告には、教職員の意識の変容や実践の改善が、生徒の変容につながっているものも多く見られた。次にその一部を示す(第9表)。

第9表 個々の振り返りシートから(一部抜粋)

生徒の変化の察知グループ「ひとり一言は毎日話す(40人)」		
	具体的実践	生徒の変化
9月	・とにかく声かけをすることを心掛けている ・挨拶。可能なら一言、二言は何か話す	・特にない
10月	・挨拶を必ずする ・生徒に関わる話題を探しそれについて話す	・少しずつ話しかけてくる生徒が増えたような気がする
11月	・挨拶を必ずする ・生徒に関わる話題を探しそれについて話す	・特定の生徒は話しかけてくるようになった(しかし、40人という目標には到底届いていない)

より良い授業の実践グループ「わかりやすい言葉を使う」		
	教師自身の変化	生徒の変化
9月	・分かりやすい言葉だけでなく、1回の指示を簡潔にするよう心掛けている	・まだよく分からない
10月	・生徒の「分からない」を敏感に察知するようになった	・生徒からの質問が増えた気がする
11月	・生徒の反応を見て、分かりやすい言葉をつかったり説明したりしている	・質問する生徒が増えた ・分かるまで教えてくれると思っている ・授業の中で分かりやすい例文を提案しようとするようになった

個々の報告を基に、実践の成果と課題、実践の継続により期待される生徒の変容等を協議し、グループの目標と留意点について検証した。

グループ協議後の発表では、全てのグループから、取組の成果を実感できたという感想や、グループで取り組んだ実践を学校全体に広げたいという趣旨の意見、新たな目標の提案等が出された(第10表)。

第10表 グループ協議のまとめから(一部抜粋)

	グループ	意見や提案
1	教職員同士の共通理解や連携	方針や手法の一貫性は、指導のスムーズさだけでなく教職員のストレスマネジメントにつながる
2	生徒の変化の察知	全教職員が協力して、「1日の中で先生と一言も話をしない生徒」がゼロの学校を目指したい
3		いじめはなくすことは難しいが減らすことはできる。学校全体の意識として継続することが大切
4	教科の授業以外での生徒の活躍の場づくり	生徒と関わる中で得た情報の共有による指導が、生徒の変容につながる
5	より良い授業の実践	学ぶべきポイントを絞ることで生徒が主体的になり、生徒同士の学び合いが増えてきた
6		「わかりやすい」を意識することで、生徒もわかりやすい言葉でわかるまで質問するようになり、自分でも考えるようになってきた。さらなる授業改善につなげたい

5 検証(校内研修)の考察

校内研修の成果と課題について、実施計画(第3表)に基づき、考察する。

(1) 「1 現状の把握」

アンケート調査①により、学校の現状や教職員の意識を具体的に把握したことで、見通しを持って実施計画を立てることができた。検証期間を終えて、「何を行うべきか明確になり、他の視点も学べたので、自分の実践につながった」、「多忙感を感じずに校内研修に参加できた」などの感想があり、ねらいを絞った段階的な実施計画により、教職員がそれほど負担を感じることなく、主体的に取り組むことができたと考えられる。

(2) 「2 個々の振り返り」

校内研修会の事前に行ったアンケート調査②では、日頃の実践を整理し、さらに現在最も意識している教育活動について考えることを通して、教職員が、自らの日頃の教育活動を客観的に振り返ることができた。

(3) 「3 課題の確認・目標の設定」(校内研修会)

ア 校内研修会の在り方

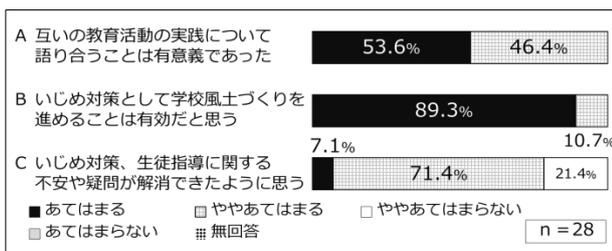
いじめ対策プロジェクト(神奈川県立総合教育センター 2013 p.37)は、校内研修会は、参加者全員が意見を出し合うことで、組織で学校の課題に取り組むという一体感が生まれ、また、多面的な捉えや教員の気付きなども捉えることができるとしている。

アンケート調査③の記述にも、「和やかな雰囲気だったのが、発言のしやすさ、集中のしやすさにつながっていると思う」、「それぞれの考え方が垣間見え、面白かった。学校全体でレベルアップしていくという上で大切な時間だった」などの肯定的な感想があった。グループワークで互いの実践を語り合い、実践の成果や課題等を全体で共有することにより、校内研修会での充実感や、新たな視点の発見を実感できたといえる。

しかし、一方では、校内研修会の内容といじめ対策とのつながり、グループ協議の主旨や進め方について不明瞭さを感じているという意見もあった。分かりやすい説明や指示等、運営に関しては課題が残った。

イ 校内研修会後の教職員の意識

アンケート調査③(第2図)では、全ての教職員が、互いの教育活動の実践を語り合うことが有意義であった(A)、いじめ対策として学校風土づくりを進めることは有効だと思う(B)、といじめ対策、生徒指導に関する不安や疑問が解消できたように思う(C)と回答している。



第2図 アンケート調査③(8月実施 一部抜粋)

記述にも、「自分の実践が多くの人と共通してい

安心感を得られた」、「生徒が『学校に行きたい』と思うために必要な4つの視点だった」などがあった。

なお、不安や疑問が解消した割合(C)は、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせて78.5%であるが、「今までの実践が良い取組だったという自信にはつながったが、まだまだ不安」、「1回の校内研修会だけでは不安の解消は難しい」などの記述もあり、これらの不安の解消のためにも、継続した取組は重要だと考える。

(4) 「4 実践と自己評価」

振り返りシートについては、「定期的実践の内容を書くことで意識が高まった」、「自分自身を振り返る良い機会となった」などの感想も多く、取組に対する意識の継続には一定の効果があったといえる。

振り返りにより工夫、改善しながら教育活動を実践した成果は、生徒の変容にも表れており、支持的風土づくりのそれぞれの視点から、いじめの未然防止を意識した具体的な取組が進んだといえる。

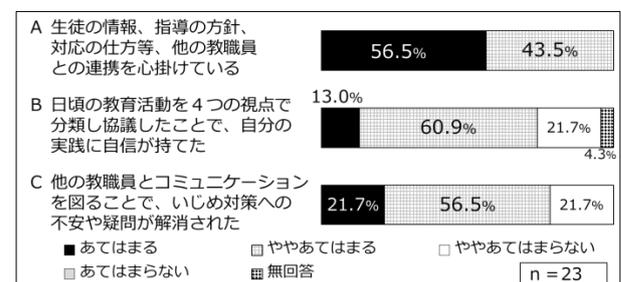
なお、シートの記述からは、取組の流れだけでなく、個々の教職員の様々な思いも見取ることができた。それらをいかすための協議の工夫についても考えたい。

(5) 「5 実践の検証・目標の再設定」

グループ協議の最初に、個々の実践の振り返りと報告を行ったことで、協議の内容が具体的にになり、課題が明確になったと思われる。協議全体の所要時間は、発表を含めても30分程度と短時間であることから、1か月ごとの振り返りシート記入時に定期的な協議が実施できれば、より実践内容が深まるとと思われる。

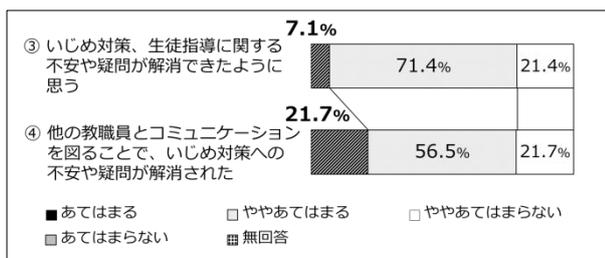
(6) 検証(校内研修)全体を通して

段階的、長期的な取組は、学校全体でいじめ対策を進める上で有効であった。校内研修の最後に実施したアンケート調査④(第3図)では、全員が、教職員同士の連携を心掛けている(A)と回答し、4つの視点に基づく取組で自信が持てた割合(B)は「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせて73.9%であった。



第3図 アンケート調査④(11月実施 一部抜粋)

また、いじめ対策への不安や疑問が解消された割合(C)は、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせて78.2%で、アンケート調査③(第2図)の割合とほぼ同様ではあるが、「あてはまる」の割合は約3倍になっている。取組を通して同僚性が高まり、不安が解消されたと感じる教職員が増えたことによるものと考えられる(第4図)。



第4図 アンケート調査③と④の比較

研究のまとめ

1 研究の成果と課題

学校の実態に即して段階的に校内研修を進めたことで、教職員が取組ごとのねらいを理解し、成果を実感することができた。校内研修会では、共通の視点を意識する教職員同士での取組を通して同僚性が高まった。

校内研修会後の取組については、目標を踏まえた実践の内容を定期的に記録することで、取組の成果や課題を客観的に捉えることができ、それに基づく教育活動の充実が生徒の変容につながった。教職員が協働して取り組むことで、学校の支持的風土づくりが進んだといえる。

今後の課題として、「実態把握」、「実践」、「振り返り」を意識した年間計画の確立が挙げられる。そのためには、アンケート調査の項目や実施内容等の検討を複数の教職員で行い、必要な取組を効率よく実施するための、学校の実情に合わせた計画の作成が必要である。そして、取組の成果や検証の結果を、学校目標や学校いじめ防止基本方針等にかさずことで、いじめ対策がより実効的になり、生徒と共に支持的風土づくりを進めていくことができると考える。

誰もがいじめの起きない学校を望んでいる。しかし、いじめはどの学校にも起こりうるものである。そして、どんなに早期発見ができて、初期対応が速やかであっても、その時にはすでに「いじめ」が起きている。だからこそ、いじめ対策として未然防止に取り組むことに意義がある。いじめを未然に防止するために、教職員が手を取り合うその先に、生徒が安心・安全に過ごせる学校がある。

2 今後の展望

「平成27年度 神奈川県児童・生徒の問題行動等調査 調査結果の概要」(神奈川県教育委員会 2016)によると、いじめに対する日常の取組について、児童・生徒会で取り組んでいる学校の、全体に占める割合は、全国平均とほぼ同じであった。それに対して、PTAなど地域の団体等と共に、いじめ問題について協議する機会を設けた学校の割合は、全国平均の41.3%を下回る26.8%であり、「児童・生徒の主体的な取組が進む一方、地域との共同の充実が必要」とされている。

今後は、教職員によるいじめ対策に関する校内研修の内容や学校の取組を、地域や保護者に発信する機会を増やすとともに、「学校いじめ防止基本方針」の提示や保護者アンケートの実施に加え、保護者会等で「安心・安全な学校」、「いじめを生まない風土」等について話題にするなど、さらなる連携を図る方策を探り、保護者や地域から信頼される学校づくりを目指したい。

おわりに

この1年間で、いじめ対策に関する多くの先行研究、国の方針を学校現場でいかすための県の取組、様々な立場からの見解等についての理解を深められたことは、大きな財産となった。そして、半年という長期にわたる検証期間で、所属校の教職員の様々な思いに触れられたことも、貴重な経験であった。

本研究が、どの学校にも、どの生徒にも起こりうるいじめを未然に防止するために、全ての学校の、全ての教職員の取組に、少しでも役立つことを願う。

引用文献

- 神奈川県教育委員会 2016 「平成27年度 神奈川県児童・生徒の問題行動等調査 調査結果の概要」
<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/848682.pdf> (2017年1月取得) p.4
- 国立教育政策研究所 2012 生徒指導リーフ 「いじめの未然防止Ⅰ」
- 国立教育政策研究所 2013 生徒指導リーフ増刊号 「いじめのない学校づくり」 p.8
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課長 2015 「平成26年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』等結果について(通知)」
- 文部省初等中等教育局長・生涯学習局長通知 1996 「いじめの問題に関する文部大臣緊急アピールについて」(神奈川県教育委員会「いじめ問題の根絶にむけて」 p.153)

参考文献

- 神奈川県立総合教育センター 2013 「いじめ対策プロジェクト(報告)」(神奈川県立総合教育センター『研究集録』第33集) pp.35-38
- 「いじめのない学校づくりのために」 p.25
- 国立教育政策研究所 2010 「問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方」 pp.2-3
- 葉山町立葉山中学校 2016 「平成28年度学校要覧」
- 文部科学省 2016 「いじめ防止対策推進法の施行状況に関する議論のとりまとめ」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/s-hotou/124/houkoku/_icsFiles/afieldfile/2016/11/02/1379121_001_1.pdf (2017年1月取得)